

## 第40回 大阪府学校教育審議会（概要）

日 時：令和3年9月13日(月) 午後3時00分～午後5時00分

場 所：オンライン会議にて実施

出席委員：浅野良一会長、小田浩伸会長代理、田村知子委員、池田佳子委員、金澤ますみ委員、沼守誠也委員、小酒井正和委員、黒田隆之委員、小原美紀委員、山崎智恵子委員（全員オンライン出席）

審議内容等：府立天王寺高校の取り組み

質疑等

黒田委員：

とても興味深く、いろいろな取組みをされていることにとても感心した。

2点ご質問させていただきたい。1点は、大学入試だけではなく、社会に貢献できる人材を育てることがゴールであるということで、大学入試の合格率を上げるだけでも十分な成果だが、更に社会貢献をする人材を養成するというので、その社会貢献をする人材というのは具体的にどのようなイメージで教育されているのか。説明の中では、東大や京大に見学に行ったりとか、大学の研究者の方のお話を聞くということが主だったが、卒業生の話ももしかしたら聞いているかもしれないが、何かそのあたりのイメージを教えてください。もう1点は、各先生方が独自に教材を作られたりとか、自分自身のスキルアップの努力をされていることにとても感心した。

さらに、校長先生としてもっとやってみたいこと、天王寺高校としてさらにやってみたいけど、制約があったり、お金や人材の問題でできなかつたりすることがあれば、教えていただきたい。

吉岡校長：

最初にご質問いただいた貢献というところだが、先輩だけではなくて、研究者の方が本当に熱く語られる。こういうことが役に立つと思って研究しているとか、そういう話を聞くと、何のために自分は勉強しているのだろう、将来自分はどうしたいのだろうということを考えてくれるし、すごい刺激を受けてくれる。そういうことがまず一つある。

それから、いろんな場面で先生方が授業中でもそうだし、人権集会とかいろんな集会があるが、そういうときに、自分のためだけに勉強しているのではない。これから自分たちががんばっていくのは、最後はみんなの役に立つ、それが自分たちの幸せに繋がると、そういうような話をしている、そういうところがイメージかなと思う。

2つ目、スキルアップの努力については、本当にすごく頑張ってくれていて、場の力と申し上げたが、生徒だけではなく、先生方にとっても場の力が働いていて、僕はよく無限の上昇スパイラルだと言っているが、何かを生徒あるいは相手のためにすると、それがさらに良い結果を生む、その結果を見てもう一つ頑張ろうというのができあがっている。発表の中でも少し申し上げたが、ぜひ他校にも広げていきたいという教員がす

に出ている。そのところからどんどん広げよう、声をかけていこうというのが一つ。

それからもっとやってみたいことは、先生たちがこれだけスキル上げていこうと思っているので、彼らにもっと自由に研修を受けてほしい。いろんなところに、いろんな良い研修がたくさん今開かれているので、オンラインもそうですけれども、そういうところにどんどん行って欲しい。しかし、なかなか時間が取れないのと予算的にも難しいところがある。自腹を切っても参加してくれているが、そういうところは彼らももっと伸び伸びと自分を高めていくことができればと期待しているし、そんなことがまたさらに取り組めたらと思っている。

山崎委員：

小学校の頃から大阪市内で天王寺高校と言えば、そのままずっとぶれずに天王寺高校のイメージというのが今も変わらずある。

2つ伺いたい、天王寺高校であることが、ずっとぶれてない要因についてが1つ。あと、先生方の転勤も絶対あると思うが、吉岡校長先生のお話の中で、先生方のベクトルを合わすことをしていると聞いたが、先生が入れ替わっているにもかかわらず、天王寺高校というカラーを継続させる要因、方法、そういったところでお気づきの点があれば教えていただきたい。

吉岡校長：

ぶれずにやっているということで、お褒めの言葉をいただけたことをすごく嬉しく思う。私も実はまだ、着任5年目だが、まずは天王寺高校を理解することから始めた。1年間あらゆる行事に顔を出して山にも登ったし、海にも行ったし、全ての行事を体験して、いろんな取組みを見ていった。そうして思ったのはやっぱり伝統の中でこれらの様々な行事が作られてきているということ。その行事には一つ一つ思いがあって、その思いを先生らが感じ取って実現していた。僕が行ったときには、ただそれがあまりにも多いので、スクラップ&ビルドも必要だという議論も実は過去にしている。そういう中でも何が天王寺高校として大事なのか、山登りもそうだが、生徒たちもやりたいと思って入ってくるし、私達もこの中で伝えたいと思う。さらにそこに卒業生が絶対絡んでくれる。卒業生が受けてきたことを、また生徒たちに返す。そうやってどんどん引き継がれているという、いわば形ではなくて、人がつないでいる、そんな気はする。

2つ目の質問にあった転勤等の問題だが、実は大きな課題。私が着任してから、もう半分ぐらい教員入れ替わっている。私達はその中でどうやって授業のレベルを維持して、いろんな行事のことをわかって、今までの教育を、いわゆる伝統を守りながら、新しいことにチャレンジしていく、そういう教員集団をどうやって作っていくかが大きな課題。その中で学校経営目標にも掲げているが、年間お互いの授業の見学を平均して5回以上行くことを目標にしている。先生方は本当に一生懸命見に行く。特に新任の先生は、まずは自分の教科の中だけだが、100回ぐらい見に行っている人もいる。自分の授業をして、先輩の授業を見て、また自分の授業をして、先輩に見てもらってということを繰り返して、自分のレベルを上げることに奮闘している。そういう形で授業をまずしっかりと受け継いでいくとともに、この行事には何の意味があるのかを新しく着任した先生方に伝えていく。桃陰塾という教員研修も年7回ぐらいやっているような形で伝えていく、その中で、新しいことにも取り組むということで、最近でいうと、オンライン授業に学校全体として取り組んで前に進んでいると思っている。

金澤委員：

天王寺高校と後の2校の発表と同じテーマで聞きたい観点が4つある。1つ目は、学校体制に関わる前提条件のところで、経済的な困難を抱えている生徒がいるかどうかについて。コロナのときにすごくみんな頑張っていて、一緒に取り組んだとの話もあったが、経済的に困難な生徒へのサポート体制はどうかということ。

2つ目は、支援や配慮を必要とする生徒がいた場合のサポート体制、これが学校体制に関わる2点。

残り2点は、カリキュラムに関わって、前回、卓越性に関わって多様性との関係も議論すべきだという話をコメントで見たが、天王寺高校は、多様性について生徒たちにどんな教育を届けているか、いろんなことやっていると思うが、工夫を教えてください。

最後、それと関連するかわからないが、とりわけ子どもの権利条約というものを明確に授業の中で位置づけたり、行事の中で取り上げたり等、もしあれば教えてください。

吉岡校長：

まず1点目の経済困窮の生徒は、実は割といるのではないかと。ただそれを今、府の方でもかなりサポートがあり、授業料に加えて学習のために必要な奨学金ということもあるので、そういったものによって、まずは対応している。ただ今回、このコロナでオンライン授業をやる中で、通信環境の差というのが、明確になり、さらに踏み込んだ調査が必要。これについて言うと、例えば無制限で家庭でWi-Fiがつなげる家庭は半分ぐらい、3割ぐらいは70Gぐらいまでで、生徒によっては非常に少ない7Gしかない。そういった生徒がオンライン授業を受けることも考慮しながら、どれだけの時間、1時間の中で繋ぐのかについて配慮している。

2点目の支援、配慮が必要な生徒については、本校にも様々に悩みを抱えている生徒がおり、例えば起立性の障がい朝起きられない、そういったことで様々に苦労している生徒たちがいる。それについては、学校で教育相談委員会というシステムがあり、そういった生徒たちの状況を聞き取り、学年と協力しながら、どういう体制を進めていくかということ、支援計画、指導計画など支援教育のあり方に沿って、本校でも必要な生徒にはその体制を組んで進めている。

3点目のカリキュラムにおける多様性について、選択の授業というのはあまり多くなく、同じような授業を受けている。私達が多様性という意味で重んじているのは、先ほど発表の中で申し上げた通り、いろんなことに彼らがチャレンジするようになっていて、それが遠慮なくできる。横から見ても、こんな面白いことやっている、人から見たらもしかしたら「それって何？」というようなことでも一生懸命やる、それを周りが否定しない。みんながこうやって頑張っていて、いろんな場面があって、例えばこの場面ではこの子がすごく頑張ったけど、こっちの場面では別の子がまたすごく頑張る。活躍の場を多く提供することで、生徒たちがそれぞれ自分の得意を伸ばしていきながら、3年間を過ごす。そういった意味での多様性というのは保障できていると思う。

4点目の権利条約関係については、私達は人権の講演会とか含めて年に学年で2回3回、あるいは学校の教員による講演も含めると結構な回数で人権HRを実施している。そういった中で、例えば平和の問題であったり、あるいはLGBTQの問題であったり、そういったところを取り上げて生徒たちに示し

ている。直接的に権利条約について取り上げるということは、本校ではできていないというのが現状。

田村委員：

頭だけではなく、心も体も鍛える伝統のある素晴らしい学校の実践だと思う。まず私からお尋ねしたいのは、1点、天王寺高校スタンダードについて。天王寺高校スタンダードは具体的に言うと、どのようなものなのか。教科ごとに、あるいは学年別にあるものなのか。それから、どのように作り、誰と共有し、授業や評価とどのように繋がっているのか。そのあたりを詳しく教えていただきたい。

吉岡校長：

天王寺高校スタンダードは科目ごとに、各学年ごとに作っているので、数はたくさんになってしまう。それぞれ教科、科目が年度の当初に、今この1年での計画、ここまでできるようになる、いわゆるCAN-DOリスト的なものを作ってまず教員の中で共有する。

その後、それを生徒たちに配布をして、「君たちにこういう目標を持って、この1年授業していくよ」ということを示す。その後はこの1年間それに則って、あとはシラバスに則った授業をしていくが、1年の終わりのところで、これも各教科の自己評価ですけれど、自分たちが今年掲げたスタンダードはどこまで実現できたかということの自己評価、パーセンテージで出してもらってそれを私たち自身で共有をして、それをまた教科はまた次の年度のための振りかえりに使っているそんな形。いわゆる、オンラインというか、共有のフォルダの中において、各教科がそれを閲覧できるようになっているという状況で取り組んでいる。

田村委員：

そうすると生徒もそれを使って、自分自身の学びを振り返るようなチャンスもあるのか。

吉岡校長：

生徒には、実は、4月当初に示したまま終わっているのが実情だが、生徒はそれぞれ2回授業評価等をアンケートでしてくれているので、学校教育自己診断も含めて、生徒の声は拾えていると思っている。直接スタンダードに対する評価を生徒からもらっているということは、今はしていない。

小酒井委員：

先ほどオンラインのお話もされていたので、それに関連して、時勢的にもやりづらくなっているかと思うが、アクティブ・ラーニングを多く取り入れられているということだが、ICTの端末だとか、各種のコミュニケーションツールはどのように普段活用されているのか教えていただきたい。

吉岡校長：

ICTを使っただけのコミュニケーションというのはなかなか難しいというのが正直な感想。オンラインでの授業の中では、もちろん生徒同士の意見交換も状況としては可能だが、なかなかそれを実行するという、回数的にもそこまでできてないのが実情。普段の授業の中でのオンライン、アクティブ・ラーニング、特に本校

の場合やり方としてよくあるのが、教員がまず全体に、発問を投げかける。それは例えば、解答のない、正解のない発問であったりする。それで、ちょっと生徒が悩みこむ。その悩みこむ時間を見計らったところで、隣と相談してもらおうを秒単位で与える。そうすると、生徒たちは今までずっと1人で考えたのをパーツと、隣の子たちと喋り合う。30秒でも充分だが、30秒の後にどうやったかっていうのを生徒の声を拾いながら、発表させる。そうするとそれがものすごくいいスピードで共有できる。そういうことによって、昔よく授業であったような「生徒にあてました、発問した、生徒が黙り込んだ」という時間はない。

テンポが非常によく進んでいく、ただそこに今のところICTというのは使えていない。英語科では、例えば、1人1台ICレコーダを持たせている。入学の時に買わせたが、英語はオールイングリッシュで授業を1年生2年生はしている。自分たちの英語がどんな英語を喋っているのかを、録音させている。それをディクテーションするのを宿題にする。そうすると意外と文法がめちゃくちゃで喋っているというようなことがよくわかる。そんな中で「きちんと喋ろう。それも間違えてもいい。でもその中で学んでいく」そういうような使い方をしている。直接のコミュニケーションのツールとして使う場面というのが、今はないと思う。

浅野会長：

私の方から一つ。これは審議会の方で考えることかもしれないが、吉岡校長先生がお考えになられる私立にできない公立の取組みは、何かあるか。特にそれが直接答えにくいのであれば、学校説明会等をされていると思うが、そこで、保護者や生徒が、「天王寺高校いいな」という琴線に触れるようなところというのは、何か私学と比べてあるのではないか。ヒントをいただきたい。

吉岡校長：

ある中学校の保護者の方が本校の説明会に来られたときにおっしゃっていたが、ある私立高校にも行って見たが、どうしても入試のこと、大学入試のことが重点的になっている。でも本校の説明を聞くと、いろんなことに取り組んでいて、子どもを全体的に伸ばそうとしてくれている。それが魅力に感じたということをわざわざ教頭先生に言って帰ってくださったことが一つあった。

それと、東大に行っている卒業生が言っていたが、東大に行ってみたら他県の学校から来ているいわゆる中高一貫とかそういったところから来ている子どもたちが何か冷めていると。もっと何か熱い人を大阪から送ってほしいみたいなことを言ってきたが、何かそんなところはちょっと違いとしてはあるのかと。

他者からの声としてそんなふうには感じていて、私達もやっぱり全人教育をしっかりやりたい、発表の中にもあったが、大学合格だけがゴールじゃないと、その近道を示すだけのことはしたくないと考えている。

浅野会長：

特に6年制の中高一貫に比べて、この府立高校は3年だが、ハンデはあるのか。それとも3年間は逆手にとってメリットなのか、どうお考えか。

吉岡校長：

ハンデといえばハンデである。やはり、理科とか社会とか特にそうだが範囲が終わらない。天王寺高校の

場合、かなり急いで、数学なんかは早く数Ⅲ終わろうということで取組んでいる。それでも中高一貫のところは、もう早くに終わった上で演習に入っているということもあるので、もっと早く進まないのかと保護者の方から言われるということもある。ただクラブも本当に最後まで目一杯やっているの、そういった集中力、クラブが終わって引退してからの集中力に繋がっており、天王寺高校の上昇曲線と言っているが、3年生の2月にそこまで仮に低迷をしても、最後にこう上がる。集中力が僕たちの強みで、最後の最後2月まで3年生は学校に来て勉強している。

いわゆる志望大学別の講習をずっとやっている。2月のそういった教室の熱気というのは、僕も廊下から見てもびっくりするぐらいで、ちょっと密になっているのではと心配になるぐらいの勢いで、去年もやっていたし、そういったところの最後の追い込みという意味では、何とかそこで追いついていこうとしていると思っている。

池田委員：

先ほど全人教育を強調されていて、私もすごく同感だが、この全人教育の難しさというか、その次のそれをカリキュラムに落されているが、今度はその全人教育が伸びたという評価をどういうふうに可視化されているのか。難しいところだが、偏差値ではない、またはテストのスコアではないものを、先生の主観的な判断でこの子は全人的に成長したではなく、どのように可視化されているのか、校長先生のご意見をいただくと参考になる。

吉岡校長：

目に見えないものではあるが、例えば普段の行動にも出てくると思う。例えば2年前、台風が大阪を襲ってきたとき、朝行ったら、校庭、校内も落ち葉だらけ、木は倒れているというすごい状態だった。とても授業ができる状態ではなかった。そこでまだ生徒も全員揃ってなかったが、今から片付けをしたいので手伝いに来てくださいと言ったら、もう校舎から溢れんばかりの生徒がおりてきた。それで一斉に片付けにかかってくれて、それを文句も言わずに主体的にやってくれた。自分からそういったところに、いろんなところに、行事の中でどう動くのか、まず「体を動かそう」みたいなところが備わってきたということをすごく感じたのが1点。

数値的に表されているもので言えば、例えば毎年3年の終わりにアンケートを取っている。そのなかで、高校卒業後に卒業生としてまた高校のことに関わりたい、手伝いたい、そういう気持ちを持ってきているかという質問に対して非常に肯定評価が高く出る。そういう意味で言うと自分のことだけじゃない、貢献する気持ち、そういったところが目に見えて出てくる場所があり、私たちはそこを見ているというか嬉しく感じているところで、それがどこまで客観的かと言われると難しいが、そんなところで見ている。

審議内容等：府立高槻北高校の取り組み

浅野会長：

基本事項を教えてください。教志コースとは、入試のときにこのコースに絞って受験するのか。それとも、入ってからわかれていくのか。その辺の仕組みを教えてください。

青竹校長：

1 年生に各コース文系理系を選択する中で、同様に教志コースについても希望を聞いている。入試の段階ではない。

浅野会長：

2 年生からわかるのか。

青竹校長：

2 年生からわかる。

浅野会長：

それで、教志コースとは、文系理系とはまた別のコースになるわけか。

青竹校長：

主に文系的になってしまうが、理系教志コースというコースも設けていて、理系の生徒には実は負担が大きく、教育課程のところでは、先ほど申し上げた 31 時間の中では収まらないので、放課後、あるいは長期休暇中に特別な授業レポート等を課して実施をしている。

浅野会長：

それでは委員の皆さんから質問をお願いしたい。

小原委員：

2 点質問がある。とても興味深く、拝聴した。

1 つ目は、教志コースを作ることにした理由というか、様々な特化ができると思うが、先ほどの天王寺高校の卓越性とまた違うところ、目指すところはいろいろだと思うが、なぜこの教師に行ったのか、経緯をお聞かせいただきたい。

それが 1 つ目で、2 つ目は先ほど天王寺高校の話聞いて思っていたことだが、先生の意欲を喚起するのはとても難しいことだと思う。高いレベルで先生の意欲をずっと高めておく。地域の人の声、卒業生の声、参加している学生の満足度や声。この辺り、地域の声はなかなか難しいが、学生の声を取るの、取れると思う。先生の声をつかむ、それを校長先生が主体でやったら多分本当の声が出てくるかわからないが、その教師が抱えているところの声を捉える試みもされているのか、たくさん声を取っているようなので、もしそういう試みをされているのであれば、それをお聞かせいただきたい。その 2 点。

青竹校長：

10 年目を迎えてということで、設置の当時、私はもちろん着任していないが、3 代前、今は武庫川女子大の教授をされている長井先生が校長先生のときに設置をした。もともと教員を目指している生徒が

多かったのが一番だと思う。

そして専門コースを立ち上げるところで、当時の教育委員会から各学校に聞かれたということがあったのではないかと、長井先生との話であったかと思う。1期生は100名程度が教志コースを希望した。2期生から50名ぐらいに落ち着いてきたが、最初はかなり地域、あるいは地元の期待感が今以上にあったものと思っている。

2つ目、非常に難しい話で、吉岡校長も言われていたが、5年すると先生方が半分ぐらい入れかわるのはどの学校でも起こっていること。先ほど申し上げた学校教育自己診断というのが、一つの先生方の気持ちを聞けるものと思っている。生徒、保護者、それから教師でいろんな質問を確認している。そこで先生方が、この部分についてはまだ足りないということも見える場面もあるし、こういうことを目指しているということを確認することもできると思っている。もちろん直接校長室に来て、意見を言われる方もいるので、そこは大事にしている。職員会議等でもフランクに言えるような雰囲気作りも必要だと思って実践している。答えにはなっていないかも知れないが、私が今感じる部分ではそんなところかと思っている。

小田委員：

小学校の巡回相談に行くと、将来の夢はほとんどユーチューバーで、学校の先生はほとんど出てこない状況で、これだけ希望があるのは非常に嬉しいことでもある。私も教育学部でそういう学生を受け入れているが、この50名ぐらいのコースを選んだ中で、何名ぐらいが教育学部、教育学部だけではないと思うが、教育の方、教員になる方向を最終的に目指して大学入ったのか。もちろん大学入ってからまた変わることもあると思うが、どのくらい教員を目指してそこに進学しているのか。そのためのモチベーションをどのように上げていくのか。中には向いてないと思って変わる子も結構いる。そういう意味でモチベーションの上げ方についてが一つ。

もう一つは、めざす学校像の中に教員、教職員が一丸となって日々の教育活動に組織的に取り組む学校とあるが、教職員が一丸となって取り組むことで具体的に大事にされていることを少し教えていただきたい。

青竹校長：

1つ目のご質問については、7期生までが高校卒業しているが、追跡調査をしていて、442名が卒業をした。そのうち152名が、学部学科に教育、あるいは子どもといったキーワードがある学部学科のところに進学をしている。率でいうと35.5%になる。ただ、文学部とか、私自身も大学は理工学部だが、教員になっているので、教員免許が取れるところというところだと92%ぐらいの卒業生が教員免許の取れる大学に進学をしている。先ほど実際に教員になっている例についてお話をしたと思うが、その卒業生は、文学部の卒業で大阪府の府立高校の国語の教員になっている。

2つ目の一丸というところは、めざす学校像のところはやはり抽象的な表現になっていると思う。実はこの金曜日と土曜日が本校の文化祭だった。北高祭と呼んでおり、北高祭というそのネーミングは生徒に募集をしたもので、先生方もお互いに文化祭と呼ばずに北高祭と呼びましょうということや、各クラスが企画を出す、アピールボードを作っている。また時間があれば本校のホームページ見ていただくと、各クラスのアピ



ールボードを載せている。そのアピールボードの投票をし、優秀賞等を決めるが、全教員が必ず投票するという形をとるなど、行事に対して、先ほど生徒が主体的にというキーワードを申し上げたが、先生方も一緒に楽しむところは楽しむということ、チーム北高ということで、生徒だけではなく教員も参加をすることかと思っている。

小酒井委員：

学校の特色として教志コースはすごいというふうに、一言で感嘆の言葉というか、すごくびっくりした。今 I C T の話をご紹介されていたが、基本私の理解だと、その教志コースのみで、非常に頻繁に使用しているのか、あるいはそれ以外のコースも使われているのか教えていただきたいのが一点。

もう一点は、端末を拝見したが、こういう P C 型の端末以外にもスマートフォンとかそういったもので、G o o g l e クラスルームなど使っているのかをお聞かせいただきたい。

青竹校長：

まず、I C T 環境だが、先ほどスライドで申し上げた通り、各クラスに W i - F i 環境が整っていて、それから短焦点のプロジェクターも入っているので、ほとんど全ての教員が使っている。もちろん使い方は各教科によってそれぞれ。例えば国語であれば本文を投影して、そこに書き込みを電子ペンで書いたり、あるいは黒板に直接投影する教員も多くいるがそこにはチョークで書いたりしている。そうすることで、本文を教員が板書するということで時間短縮になり、非常にスピーディーに展開できる。英語の教員も同じような形で、英語の場合は 4 技能があるので音声等を示すときにうまく教科書会社からの提供もあるのかと思うが、音声の流れると本文の色が変わっていった、今ここを読んでいるというのが見えるものがあったり、そういう使い方をしている。

あと、私が先ほど使ったパワーポイントのスライドショーを使いながら授業を展開していく。よく穴埋めのプリントを使うことがあるが、生徒が持っているプリントと同様のスライドショーを作っておき、答えがそこに表示されたりとか、あるいは私も途中動画を入れたが、動画や画像を使っている。これは地歴公民の先生方がよく使っている手法。

それから、2 点目の G o o g l e クラスルームについて、スマホ等を使うのかどうかだが、授業の中では特にということがない限り、スマホを使わせることはしていない。生徒たちが週末課題、あるいは日々の課題で使っていることがあるが、それを各家庭で確認するのが今までだった。ところが、1 人 1 台端末、GIGA スクール構想ということで、本校も C h r o m e b o o k が生徒全員分配付されたので、生徒たちに持ち帰らせている。今までは小さなスマホの画面で見ていたものが、生徒によってはそれを使って、大画面というほどでもなく、14 インチほどだが、確認をして、課題をやって、提出をするということを行っている。授業の中でということになると、先ほど申し上げた教志コースは、先ほどのケースで使っているが、他の教員でも先進的に使っている先生方は、この C h r o m e b o o k の活用をもう間もなく始めようというところに来ている。

金澤委員：

先ほどの天王寺高校の校長先生の質問と項目は一緒に、1つ目は経済的な困難を抱えている生徒さんの状況を知りたいということが、1点。高槻北高校でWi-Fiの環境が整備されているということだが、例えば、生徒が端末を持って帰ったとして、どの程度使える環境にあるのか、もしわかれば教えていただきたい。

2点目は、支援や配慮を必要とする生徒がいた場合の校内でのサポート体制。

3点目は、多様性というものについて生徒たちにどんな教育を届けているか。

4点目が先ほどと一緒に、子どもの権利条約を学校の中で取り上げて使っていることがあれば教えていただきたい。特に、この多様性や子どもの権利条約については、教志コースだから必要という意味ではないが、特に学校の先生になりたいと思っている生徒に向けて、そういうメニューが入っているのかどうか、もし現在は実施していない場合、今後は重要となってくるのか、先生のご見解をいただきたい。

青竹校長：

まず経済的な部分で、先ほどのスライドで少し見えたかと思うが、割と閑静の住宅地のところにあり、地元地域の生徒が多いので、大阪府全体で見ると、本校は経済的にしんどい生徒は少ない方だろうと思っている。それでもいくつかは生活保護家庭があったりする。先ほど吉岡先生も言っていたが、府教育庁からの調査があり、Wi-Fi環境の調査を行っている。全校生徒1027名のうち6名が家庭でWi-Fi環境が十分でないことが確認されている。先ほど申し上げたが、Chromebookを家庭で使う中で、支障が出てくる生徒を6名確認している。これはおそらく多くの府立高校の中では少ないと思うが、5台はモバイルのものを用意できていると思うが、1つ足りないのもので、この後教育庁とも調整しながら、全員の生徒が同じような環境で家庭でも学べるような体制を作っていきたい。

2つ目の支援に関係するところは、年度当初の職員会議で、身体的なものも含めて、支援が必要な生徒についての情報共有を行っている。このときには、可能な限り非常勤講師の先生方にも入っていただくようにしており、もし勤務の関係で入ってもらえない場合には、教科の代表者が十分な説明を行い、非常勤講師の先生の授業の中で支援が必要な生徒がいる可能性もあるので配慮している。また、先ほど吉岡校長先生から言われたような体制としては、教育相談委員会があり、そこで支援が必要な生徒の動向を週に1回、保健部会、それから学年主任会で支援が必要な生徒の様子について、変わったところがないか、あるいは年度当初につかんでいなかった生徒で、先ほど申し上げたような生徒が出てくるので、新たな支援が必要な生徒についての動向の確認等も行っている。

3点目の多様性については、先ほど申し上げた教志コース生、あるいは文系理系関係ということで、教志コース生50名ぐらいと言いましたが、概ね毎年3クラスに分布をする形になっている。1つのクラスに1つの選択をしている生徒が集まっているというわけではなく、複数の進路希望を持っている生徒がバラバラという感じ。あるいは1年生の芸術選択でも、音楽、美術、書道と三つ選択があるが、音楽クラス、美術クラスという形にはせず、クラス分けは大変だが、必ず混合のクラスにしている。そうすることで、いろんな個性をお互いに認め合うことができると考えている。

それから、権利条約に関して、これも吉岡校長先生が言われたのとほぼ同じで、直接それに関わって

ということはないが、特に 2 年生の総合的な探究の時間のところで、そういう取り組みをやっていて、様々な人権課題の当事者の方に講演をお願いし、いろんな体験を語ってもらうという機会を設けている。

山崎委員：

3 点質問させていただく。

1 点めは、学校の立地について、通っている生徒も近所の子供が多いということだったが、志願者数の倍率はどうか。教志コースを取り入れてから志願者が伸びたといった推移があれば教えてほしい。

2 点めは、Chromebook を生徒 1 人 1 台というお話があったが、それは学校からの貸与なのか、それとも生徒自らが購入するのか。

3 点めは、学校の様子を見たとき、制服を生徒さん着用していたように思うが、トランスジェンダーの生徒の場合、制服を例えば男性用女性用で決めておられるのか。それとも、自由に女性、男性関係なくパンツ、またはスカートを選べるのか、シャツの色まで自由に選べるのか。

青竹校長：

まず、志願者数については、3 年前の今の 3 年生の選抜までは 1.1 倍を超えていた。1.1 倍を超える学校はそう多くないので、人気校といえると思う。ただ、最近はこの 2 年生の時が 1.06 倍で、今の 1 年生は 1.02 倍ということで、少し陰りが出ているところがある。理由として、一つは本校の近くに私立の学校が新校舎に移転し、今年 2 年目になっている。移転 1 年目は様子見だったと思うが、2 年目になると評判が中学校の後輩に伝わったのかなと推測している。もう一つは、コロナの関係で、中学校の授業もギリギリで進めていると聞いており、少し頑張って本校にチャレンジするのは厳しいかなあと敬遠されたのではないかと分析をしている。倍率が高くなると、不合格となる受験生も増えるので、微妙なところもあるが、志願倍率 1.1 倍を校内では目標としているところ。教志コース設置の影響については、これに特化した分析はしていないが、3 年より前は 1.1 倍をコンスタントに超えていたので、この教志コースでマイナスになったということは少なくともないと考えている。教志コースがあるから本校を選んでくれていることは確認ができてるので、そういう意味では倍率が増えていることに少なからず影響しているのではないかと。

2 点めの Chromebook については、本校独自ではなく、国及び府の政策であり、府から生徒に貸与しているという認識。

3 点めの制服について、女子生徒にはパンツを認めているが、現在はパンツを着用している生徒はいない。シャツのカラーのバリエーションは白とグレーとブルー 3 種類あり、生徒が気分を着てくるので、統一しているわけではない。男子のスカートについて、今は認めていないが、もしそういう希望があれば、女子のパンツを認めているので、可能性はあると思っている。

黒田委員：

2 点質問させていただく。

1 点めだが、入学してくる生徒の 97.3%が高槻市・茨木市・島本町在住と聞いた。私は大阪の南の方に住んでいるが、この教志コースがあるということを実は知らなかった。大阪府全体からこのコースに行き

たいという実際の問い合わせや、実は遠方から通ってきている生徒がどれくらいいるのか。このコースに興味を持っているが、遠方のため通いづらいということで選択がされないのであれば、教志コースのようなものを他の学校に展開することを考えても面白いのかなと思っている。

もう一点は、この教志コースを実際にマネジメントしているのはだれかということ。学校のホームページを見ると、教志コースの生徒は、芸術科目や体育科目が取れない代わりに、教師入門や教師体験といった科目を選択するというようにカリキュラムを工夫されていた。また、学外に見学に行ったり、大学の先生が来たり、時間割外の科目を設置しているというも見た。そういったことは、校長先生、教頭先生あるいはコース担当の先生がいるのかもしれないが、どのようにマネジメントをしているのか。併せて、教志コースは高校に教員の先生がいるからできるのかもしれないとも思った。それ以外の例えば、プログラミングコースといった特色あるコースを設けようと思ったら、それができる先生がいないとダメなのかもしれないと考えたのだが、それについてヒントやアイデアがあれば教えてほしい。

青竹校長：

教志コースに近いコースを持っている学校は本校以外にもいくつかあり、例えば八尾高校や八尾翠翔高校は同様のコースを持っている。本校は大阪の北部に位置しており、北部であれば本校ということになるのかと思う。先日、教志コースの講義の中でお越しいただいた吹田市出身の先生が、生徒に「吹田市出身の人はいるか？」と聞かれたが誰もおらず、そのときの生徒は50名だったが、高槻・茨木の生徒ばかりということだった。教志コース生徒は約98%が高槻市・茨木市・島本町在住なので、手を挙げてもらった中には、そこ以外に住んでいる子どもがたまたまいなかったということかと思う。多くの学校でこういうコースがあれば、学校を越えての多様性が実現できるのではないかと個人的に思っている。

二つめのマネジメントについては、教志コース長がおり、もちろん時間軽減をしているが、その時間軽減では足りないぐらいに様々なことをしてくれている。教志コースに関わる教員の継続性が大きなマネジメントの課題と考えている。教志コース長を1名に加え、関係のコーディネーターという形で様々な教員が関わっているが、そのコーディネーターについては、今までは、各教科の持ち時間のバランスを見ながら、少し余裕がある先生に入ってもらっていた。数年は継続することになっているが、そうすると、ある教科で先生があまりに忙しすぎるとなると、その教科からは教志コースの方に関わってもらえないということがあった。それだと、継続性の問題も出てくるし、特に教志コースがあるから本校に着任したいと考えている教員もいるので、やはりその先生に関わってほしいということも考えている。今回、ある教科について、非常勤講師を確保して、その教科の先生に関わってもらえることになった。教志コース長についてもここ数年続いて同じ方やってもらっているが、それではこれから先が不安なので、来年度はコース長を変えようということで、今新しい人に二人三脚で進め方を勉強してもらっている。特色のある専門コースで教える教員については、中の教員だけでなく、教員のスキルの問題もあるし、教員の異動を考えると非常に難しく、外部人材に頼るところがある。本校もこの教志コースでは、たくさんの外部講師の方に来ていただいている。マネジメントは校内でやるとして、実際の事業に関わる場所は外部の人材を使っていくということは、おそらく多くの専門コースを持つ学校で実践されているのではないかと。

審議内容等：岡山県における公私協力学校について

黒田委員：

今の時代で考えてもかなり先進的な取り組みかと思うが、今と当時の時代の状況は違うとはいえ、それを平成の初め頃にされていたということで、とても興味を持った。

質問だが、全国から来られるように私立にしたということだが、今現在、岡山県外からどれくらいの生徒が来ているのか。

もう 1 点は、全寮制ということで、場所的に通うことができる人が少ないので、寮を作られたのかと思う。一方で、今日的な理由で考えると、家庭環境の問題で、学校に通いにくい高校生が増えてきており、全寮制にすることで、色々な困難を抱えている家庭から逃れて、学校という、ある意味守られており、自分をしっかり見てくれる人がいる環境で勉強ができるというメリットがあり、いい取り組みだと思ったのだが、ホームページを見てみると、授業料は就学補助金があるものの、それに加えて寮費がかかるため、貧困家庭では無理なのかなとも感じた。それ以外の様々な課題がある方だったらこういう方法もありかと思うのだが、それについての意見を伺いたい。

岡山県：

全国からどれくらい生徒が来ているかという点については、県外出身者は全体の 6～7 割程度。

全寮制に関しては、授業料はだいたい県内の平均的な私立高等学校の授業料となっているが、寮費が毎月 5 万数千円かかる。この点については事前に保護者の方に説明し、ご了承いただいた上で入学していただいていると認識している。

金澤委員：

私の方からは論点は先ほどと一緒だが、この学校の特徴と重ねて教えていただきたい。

1 点めは、経済的な困難に関して、入学に必要な費用は理解した上で来ているということだが、一方で今コロナ禍となったこの 2 年弱で家庭の経済状態が急変したことにより、例えば全寮制との関係で、転校しないといけなくなったなど、経済状態が影響するようなことっていうのがあるのかどうか。

2 点めは、支援や配慮が必要な生徒がいた場合のサポート体制についてだが、ホームページをみると、もともと不登校だった生徒が語ってくれている動画があった。おそらく数十年前のサポートが必要な生徒と今のサポートが必要という生徒の層が違うと思うが、現在サポートが必要な生徒がいた場合の体制がどうなっているのか。また、可能であれば、SSW（スクールソーシャルワーカー）がいるということだが、何名いて、身分は正社員なのかどうかを教えてほしい。

3 点め、4 点めは先ほどと一緒で、3 点めは多様性の教育をどうしているのか、4 点めは子どもの権利条約をカリキュラムの中に位置づけているかを教えてほしい。

岡山県：

まず家計急変に関しては、現段階で学校から、そういう生徒がいるという話を聞いていないので、いない

という認識をしている。

配慮・支援が必要な生徒、どういう風に対応しているかについてだが、体制のこと、SSW（スクールソーシャルワーカー）の数や正職員かどうかというのは把握できていない。

多様性については 10 個の専門コースを設けているということで、それぞれの適性などに合った教育がなされていると考えている。詳しいカリキュラムについても把握していない。

田村委員：

公私協力学校にすることのメリット・デメリットについて、県側と学校法人側でどういうものがあるのか、これまでの実績を踏まえて教えていただきたい。

岡山県：

メリットについては、公立では全寮制はやはり取り組むのが難しかったが、私立の高校にすることで取り組めるようになった。行政側からの視点だが、特にデメリットは感じていない。

浅野会長：

今回の話を参考に、次回以降の審議で意見をまとめて頂きたい。それでは、事務局に司会進行をお返しする。